

偉大なる忍辱行

駒澤大學臺灣學生會員

林 證 峯

「自身に苦を受けて心厭悔せず」と云ふ戒めは、優婆塞戒經に示めされた修養の五大標準の一であつて、此を忍辱の行とも申してゐる。つまり此の世を娑婆（梵語娑婆）、即ち譯して忍土といふて堪忍の大切なる事を力説したのです。凡そ人の一生は、月に叢雲、花に嵐と言つた様な工合に、衆苦身に迫り衆難已れを襲ふのが常態である。其故之を忍び耐へる力が無つたなら、人間は一日も生きて居られない。况んや修養に志す者の如きは先づ以て忍耐の力を養ふ事が必要であると思ふ。西洋の格言にも「最もよく堪へ忍ぶのは、最もよく爲し能ふの人なり」（ミルトン）と言つてゐる程です。我等は憂き事の猶も此上に積れかし、限りある身の力を試めさんといふ勇氣を以て如何なる苦惱に遭遇するとも、決して辭易するが如き事なく寧ろ身を挺し

て難局に飛び込むの覺悟なければならぬ。

佛典中には、釋尊が成道第九年の夏安居を懺嘗彌縛の變史多園^{イシタエン}で過しつゝあつた時、佛教々團の比丘達に忍辱を戒める次の本生譚を說いたと記されてある。

昔印度に於いて伽奢國^{カシカモノガタリ}の梵施^{ブラフマダッタ}といふ王と、拘薩羅^{クサラ}の長壽^{シラガーリ}といふ王とがあつて二人は祖父以來の仇敵であつたが、遂に長壽王の軍破れて王と妃とは陶器師の或る家に隠れることになつた。其の間に生れたのが長生といふ王子である。然る後長壽王並びに妃が梵施王に捕へられて慘殺される時、王は變裝して群衆の中に交つてゐた自分の子である長生に向ひ、「怨無輕重不足報、以怨報怨、怨終不除、唯有無怨而除怨耳」、怨は輕いのも重いのも報いてはならぬ、怨を以て怨に報いたならば怨といふものは遂に消えるものではない、唯怨

むことのないことで怨を除くことが出来るものだ」と
再三遺言したのである。長生は其後梵施王の都波羅捺

斯城に入つて種々の學藝を學び殊に琴を彈する事に妙を得てゐたので、此事が梵施王の耳に入りて王から呼び出されて御前演奏をなし、其技倅を認められて遂に王の近侍者となつた。或る日王は出遊し炎熱の爲に疲勞して車から下り、長生王子の膝を枕として一寝入りした、其様子を見ると王子は「此の王は我が領土を奪ひ、剩へ父母をも慘殺した不共戴天の仇敵である。今こそ昔日の怨を晴す時だ、斯う思つたから剣を抜いて今や一撃の下に王の首を断たんとしたが其刹那にフト思ひ浮んだのは亡き父王の遺訓であつた。

「怨みに怨みをもつて報いては、息むことなし、怨みなければ怨に勝つ。オ、此の撃^まは朽ち果つることがないであらう、私は此の怨みを忘れて了はう。」

燃ゆる思ひに悶えた王子は二度も三度も斯う思ひ返し思ひ返して又剣を鞘に納めたのであつた。すると今迄寝入つてゐた梵施王が突然にはね起きた。

「大王さま、如何してさうあはてゝお眼覺めになりましたか?」と問ふと、王は「いや、只今長壽王の一子

長生といふものが、わしを捕へて殺さうとして居た夢を見たので驚いたのぢや」

と答へた。王子は自分が長壽王の王子である事が感づかれたものと思ひ、死を覺悟して始めて事の始終を打ち明けたのである。其の結果、梵施王は慚愧し、長生王子の忍辱に驚喜、讚嘆して遂に長壽王から奪ひ取つた領地を返し、更に自分の王女を與へて、過去の暴惡を謝り、今まで仇敵であつたのが、忽ち父子の如く和合して行つた……。

「彼れ、我れを罵れり、打てり、敗れり、嗤へり」と、斯る思ひを抱ける者は、其の怨、解くることなし

「彼れ、我れを罵れり、打てり、敗れり、嗤へり」と、斯る思ひを抱かざる者は、其の怨、解くことなし。この世に於て、怨は怨を以てしては、終に解くべからず、怨を以てこそ、解くべけれ、之れ不滅の眞理なり。

「われ等は、此所に死するものあり」愚者は之れを覺らず、人もし、之れを覺れば、其れよりして、争ひ息む

私共は此の偈頌を拜誦する時、何時も馬子の大逆に對して隱忍自重し給ひし聖德太子の歴史的實話を想ひ起さず居られない。太子傳暦の記事に據れば、畏れ多い御事ではあるが、時の崇峻天皇は中々御氣の短い御頑固でました様である。『天皇爲性剛腸』とあるに依つても分ります、其時代に天皇は馬子の横暴を御憤りになつて、どうしようかと太子に御相談になつた事があつたので、太子は屢々佛教の忍辱波羅密といふ忍耐の修行や其功德を卸説きになつて、御諫め申ししたのであつた。けれども天皇には何分にも御強情にましますので、或る年の冬、臣下から獻納した山猪を御指示になつて「何時か此の猪の頸を斷つが如く朕が嫌ふ者を断つ事が出來ようか」と宣ひて馬子の事を暗示されたのである。其時御側に侍べてゐた太子は大いに驚き給ひて「斯様な事から御禍を釀す様な事がありますから小宴を御催しになり、群臣宿衛の人々には何か御心附を賜られたい」と奏し、人々に向つて今日陛下の宣ひし事は決して他人に告げてはならぬと口止をされたにも拘らず、一人の馬鹿者があつて此事を一切馬子に告げたので、遂に馬子は東漢直駒といふ痴情狂の様

な奴を唆かして天皇を弑し奉ると云ふ大逆罪を犯すに至つたのである。太子は此事をお聞きになり、大哭し給ひ「陛下愚兒の言を用ゐず、是過去の報なり、唯恐らくは大臣ものがれず、其報忽ち至らん」といはれたとあるが、簡潔なる漢文口調で『これ過去の報なり』といふ一句だけでも、私共は其の時の太子が無限の御悲情の遺る瀬なく、日頃の御信仰であつた佛教の因果應報の道理で暫し御誦めになつた御姿が涙ぐましくも痛く想像せられるのである。

昔から漢民族は、一忍を以て百勇を支ふべく、一靜以て百動を制すべし（蘇老泉）と言つて人の跨をくぐつた韓信を稱揚し、日本の武士道は「ならぬ堪忍するが堪忍」を尊ぶ、遺教經にも

「忍の徳たる、持戒苦行も及ぶ能はざるなり、能く忍を行ふ者は乃ち名づけて有力の大人と爲す」と仰せられてある。

私共は此處にまだ十九歳の弱年に御存せらるる聖德太子が大哭し給ひつゝ「是過去の報なり」と嘆じて御忍びになされた所に偉大なる御人格を認めるものである。（五・四・東京ニテ）